

客船よもやまばなし(172)

最先端クルーズフェリーが日本海にいよいよ登場

大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授

池田良穂

□の7月、日本海に最先端の造船技術を駆使した高速クルーズフェリーが2隻同時に登場する。総トン数は17000トン、最高速力31.5ノット。航路は舞鶴と小樽の間で、運航するのは大阪に本社を持つ新日本海フェリー。これまで、2泊3日であったサービスを、30ノットの高速にすることで1泊2日の航海に短縮。高船価で高燃費という運航コスト上のデメリットは、これまでデイリーサービスに必要だった3隻を2隻に減船することによってカバーできる。10時間余りも航海時間が短縮されるという利用者にとってのメリットを最大限に活用して、需要の増大を図るといった戦略のようだ。

新日本海フェリーは、既に敦賀～北海道航路に29ノットの高速カーフェリーを投入することによって、このフェリー高速化のメリットを実証済みであり、いよいよ舞鶴航路にもこのコンセプトを展開したというわけ。さらに電気推進を定期フェリーで本格的に導入することも画期的だ。

夏の日本海は極めて静かだが、冬の日本海は大荒れの日が少なくない。この冬の日本海を、定時性を確保して運航するためには大きな馬力余裕が必要だが、電気推進システムでは、こうした大きな負荷変動への

対応が比較的容易である。

この新造船の推進器もユニークだ。360度旋回できるポッド式推進器が日本のフェリーとしては初めて導入されるのである。これは、造船技術的にも画期的なことと言える。しかも、ディーゼル機関で回転する通常型プロペラのすぐ後ろに、ポッド推進器を設置し、それぞれのプロペラの回転を逆にすることにより2重反転プロペラとして機能するようにして、推進効率の向上を狙った点はいよいよユニークと言える。しかも、筆者が注目するのは、こうした新しい技術の導入を積極的に進めたのが運航者である新日本海フェリーであるという点である。

欧州のフェリー運航会社ステナ・ラインが、2万総トン、40ノットの大型アルミ高速カーフェリーHSS1500型を運航者の立場から主導的に開発したことは、よく知られている通りであるが、日本のフェリー会社が、新しいフェリーの開発に極めて積極的な姿勢を示し、造船所を引っ張りながら斬新なクルーズフェリーの建造に漕ぎつけた点で、まさにエポックメイキングな事例と言えよう。

そんなわけで、この船が見たくて見たくて、なんとか時間を作って3月上旬に長崎に出かけた。200mを越える大型船になるということで、従来三菱重工でフェリー建造を一手に引き受けていた下関造船所に代って、大型客船建造に特化する方針を固めている長崎造船所が、この2隻の姉妹船を建造することになった。

長崎空港でレンタカーを借りて、長崎市内に到着した頃にはすっかり日が暮れていた。宿泊を予定していたホテルの近くの出島岸壁から、対岸の三菱の艦装岸壁を眺めてみたものの、お目当てのフェリーの姿が見えない。これにはさすがにかなり焦った。進水後の艦装は、香焼か下関で行うのであろうか。不安がよぎる。来る前に、正確な情報を掴んでおくべきであったと悔やまれた。

翌朝、朝日が上がるのを待ってホテルを車で出て、対岸の長崎造船所へと回ってみた。岡の上に聳える三菱重工のビルを越えて、さらに海岸線を進むと、平行に並ぶ2つの乾ドックが目飛び込んで来た。そして、そのドックの中には艦装工事に入った第1船「はまなす」と、隣のドック内でブロック搭載中の第2船の姿があった。ちょうど山道の狭い道路なので、停車をしてゆっくりと2隻を見ることはできない。慎重に車を先に進めて、なんとか駐車場をみつけて車を預け、道路を徒歩で戻ってドック内の2隻をじっくりと見る事ができた。まさに長崎まで来た甲斐があったというもの。この時撮影した写真は、現在編集中的「フェリー客船情報04」に掲載の予定であるが、本誌の読者には一足早くご披露したいと思う。



はまなす

こうした画期的な斬新なクルーズフェリーがいよいよ日本でも登場することを、一般の人々にもぜひ知って欲しいと思う。そんなことを思っていた矢先、関西クルーズ振興協議会の事務局から1本の電話が入った。なんと、同協議会が、船旅振興のための活動のひとつとして、長崎で完成した同船の回航航海を使って、長崎～舞鶴間のクルーズを企画するというビッグニュースであった。これは素晴らしい企画であり、クルーズ客船やカーフェリーによる船旅を一般の人々に知ってもらうための、またとない好企画である。

そして、最先端の技術を満載した船であることも、この機会に大いにアピールして欲しいと思う。日本の造船技術が今でも世界の最先端を走っていることの「証」として同船の存在意義は大きい。

7月の姉妹船との同時就航に照準を合わせて、みんなで大いに盛り上げていくことが、日本のフェリー業界と造船業界へ一般の人々の関心を向わせるための、最も効果的な方法のように思えてならない。